

日本語における非構成素等位節の考察—分裂文を中心に

Non-constituent Coordination in Japanese Cleft Sentences

本研究は、日本語における移動が関与する分裂文を用いて、移動された一般名詞句は非構成素でも等位節をなすことができるという現象を考察し、その構造を考える。まず、事実として(1)と(2)のような対立が観察される。

- (1) a. 太郎が _i 食べ、花子が _j 飲んだのはそれぞれ、シュークリーム(を)_i と午後の紅茶(を)_j だ。
 b. 太郎が _i 本を借り、花子が _j 漫画を買ったのはそれぞれ、[先週の土曜日に _i と日曜日に _j] だ。
- (2) a. *太郎が _i _j 食べたのは、三時(に)_i とおやつ(を)_j だ。
 b. * _i 三時に _j 食べたのは、太郎(が)_i とおやつ(を)_j だ。
 c. * _i _j おやつを食べたのは、太郎(が)_i と三時(に)_j だ。

(1)と(2)の対立を説明するために、次のような制約があることを提案した。

- (3) 等位節を成すには、名詞句同士は範疇（C-selection restriction）、格、 θ 役割が同じでなければならない。

本発表では、日本語の非構成素等位節を形成するために、(3)に示した制約を満たす必要があることを示し、(3)を支持するデータを提示する。また、(3)が正しければ、名詞句が異なる節に基底生成しなければならないということが予測できる。その理由は、同じ節の中に格、範疇、 θ 役割が一致する要素は一つ以上存在しないからである。よって、(2)に示した例のように、単文である場合は全て等位節を許すことができないということが説明できる。本稿の最後に(1)に示した文、すなわち非構成素等位節はどのような構造を持つか、そしてどのように派生されてきたかを議論する。結論として非構成素等位節は音連鎖では一つのかたまりになっているように見えるが、実は bi-clausal の構造をなしていることを主張したい。

参考文献

- Citko, Barbara and Gracanin-Yuksek, Martina (2013) Towards a new typology of coordinated *wh*-questions. *Journal of Linguistics*, vol. 49. pp.1-32
- Saito, Mamoru (2012) Case Checking/ Valuation in Japanese: Move, Agree or Merge? *Nanzan Linguistics* 8, pp. 109-127
- Takano (2002) 'Surprising constituents' *Journal of East Asian Linguistics* 11, pp.243-301
- Takano (2004) 'Coordination of verbs and two types of verbal inflection' *Linguistic Inquiry*. Vol35. pp. 168-178
- Zhang, N. (2007). The syntactic derivations of two paired dependency constructions. *Lingua* 117: 2134–2158.